

## H31地域協働研究（ステージⅠ）

### H31-I-12「農作物の生産を通じた高齢者の居場所づくりと地域活性化」

研究提案者：唐丹公民館

研究代表者：総合政策学部 吉野英岐

研究チーム員：猪又博史・山口政義（釜石市唐丹公民館）

#### <要旨>

本研究では、東日本大震災の被災地における高齢者の居場所（生きがい）づくりを目指して、釜石市唐丹町の農業生産活動や販売活動を活性化させることで、高齢者が安心して暮らすことができ、いきいきと周囲とともに活動できる持続可能な地域社会の構築に資する取り組みを実施し、その効果を検証するものである。農業生産活動に学生が参加することで、活動の注目度や世代間交流が実現し、その後の販売活動につながるなど、大学と公民館の連携活動が成果をあげつつある。

#### 1 研究の概要（背景・目的等）

釜石市の南部に位置し、小白浜、本郷、花露辺、大石、荒川、片岸、山谷の7つの集落からなる唐丹町は、平成31年2月末現在で、人口1630人、世帯数704世帯、高齢化率45.4%、年少人口率8.1%の地域である。

東日本大震災で釜石市の沿岸部は大きな被害を受けた。唐丹町は釜石市の資料によれば、21.0mもの高さの津波が押し寄せ、平成23年5月20日の時点で、人口2,106人のうち津波・地震での直接の死亡者または行方不明者32人、956の住戸のうち35.9%にあたる343戸が被災した。浸水区域は花露辺3ha、本郷24ha、小白浜15ha、片岸16ha、荒川～下荒川36ha、大石3haで合計97haに達した。このように唐丹町では人命、住宅、土地に大きな被害が及んだ。



その後、復興事業が進み、漁港や住宅の整備は進んだが、今後は高齢者（被災者を含む）の居場所（生きがい）づくりが喫緊の課題である。特に、高齢者の閉じこもり予防や健康増進につながるような生きがいを感じられる場の創設が求められている。

また唐丹町では近年、住民の高齢化に伴い農作業の担い手が減少し、耕作放棄地が増加し、農業生産活動も減少しつつある。一方で、公営住宅に入居した被災者は、かつて行っていた農業生産活動ができなくなり、自分で野菜などを作る機会が失われてしまった。本研究では、高齢者が安心して暮らすことができ、いきいきと周囲とともに活動できる持続可能な地域社会の仕組みづくりにむけた課題の解決を目指した。

具体的には大学と公民館が連携して、高齢者を主な対象とした農業生産活動（公民館主催行事）に、岩手県立大学

の大学生が参加し、ともに活動し、交流することで、高齢者の活動意欲ややりがいを高めて、農業生産活動が持続的に行われるような基礎を作り上げていくこととした。そして、その効果を検証して次年度以降の活動につなげていくことを目指した。

#### 2 研究の内容（方法・経過等）

唐丹公民館では2018年度から地域住民を対象とした米作りや農園での事業を実施している。これらの取り組みでは、生産した農産物の提供や利用は行ったが、販売機会の創設までには至っていなかった。そこで、農産物の販売機会をつくり、生産活動を経済サイクルに結び付け、小規模でも生産-販売-収入-投資-生産-販売-収入-投資というサイクルを実現することで、活動に参加する住民の意欲を高め、参加者数と活動規模の拡大を図っていく方向性が公民館側から示されていた。

そこで、2019年4月26日（金）に、唐丹公民館と県立大学吉野研究室で打ち合わせと現地視察を実施した。そこで、片岸・川目地区で公民館が借り上げた農園（公民館農園）で、昨年度から「畑でお茶っこサロン」として、さつまいも、大豆、小松菜などの植え付けと収穫作業が準備されていること、さらに同地区の水田での稲作が実施されること、また荒川地区では「まこもだけ」（イネ科の多年草）の栽培も始まっていることが確認できた。また唐丹公民館（唐丹生活応援センター）は小白浜の災害公営住宅と同じ棟内にあり、居住者の心身の健康維持のためさまざまな活動を行っており、農作業もその柱の1つになっていることが確認できた。

2019年5月26日（日）に岩手県立大学の3・4年生の学生9名と教員1名で田植え作業に参加した。この作業は唐丹公民館が主催して、JA花巻釜石支店、農家組合、営農組合、平田公民館の協力を得て実施された。

稲作は昨年度から開始され、今年度が2回目であった。当日は好天の下、地元の高齢者が20名程度参加し、大学生と交流しながら作業を楽しんだ。大学生にとっては田植え作業を行うこと自体が初めての体験であり、専門家の指導を仰ぎながら作業を行った。

田植え作業



田植え作業



2019年10月5日（土）には、岩手県立大学の3年生の学生7名と教員1名で稲刈り作業に参加した。田植え作業に引き続いて実施された作業で、唐丹公民館が主催して、JA花巻釜石支店、農家組合、営農組合、平田公民館の協力を得て実施された。稲刈り作業もほとんどの学生にとっては初めての体験であったが、田植え作業に続いて参加した学生もあり、地元の方々と交流しながら、楽しく作業を行うことができた。

稲刈り作業



学生が参加した作業は上記2回であったが、唐丹公民館では年間を通じて以下のように作業体験を企画実施した。

#### 唐丹公民館主催の農業関連イベント

月日	内容
4月19日	畑でお茶っこサロン
5月17日	畑でお茶っこサロン
5月26日	田植え体験
6月17日	さつまいも植え
9月10日	畑でお茶っこサロン
10月5日	稲刈り体験
10月6日	唐丹の日・農業まつり
10月23日	さつまいも・大豆の収穫
10月29日	まこもだけを使った料理の会
12月1日	スカットボール大会・産直コーナー
12月6日	畑でお茶っこサロン
12月10日	豆腐づくし&干し柿揉み

「唐丹公民館だより」から作成

### 3 これまで得られた研究の成果

高齢者の居場所づくりについては、年間を通じたイベントの展開により、参加者にとっては貴重な機会を提供できていると考えられる。大学としての関与は学生の参加が中心であるが、春と秋のイベントに参加したことで、地元の参加者にとっても、学生にとってもコミュニケーションを図ることができ、参加意欲の向上につながったと考えられる。

耕作放棄地の解消については、継続的な利用により、限られた面積ではあるが、農業がおこなわれたことが確認できた。少なくとも放棄地の拡大を抑える効果がみられた。ただ公民館職員によれば3か所の圃場の整地には大きな労力が必要で、その労働力の確保が課題になっている。今後はこうした部分にも学生の参加を検討するなど外部の人材の協力体制の構築が課題である。

農作物の生産拡大と地域経済の循環については、今年度は公民館の企画により、10/6と12/1に収穫物の即売会が実施され、地元でとれた農産物の地域循環や地場消費が初めて実現できたことが大きな効果である。また販売して得た収益を今後の活動継続にまわすこともできた。

このように、高齢化の進む被災地で、農作業イベントを実施することで、参加者の居場所をつくりつつ、耕作放棄地を解消し、あわせて循環型の地域経済をつくる取り組みは小規模ではあるが、住民や地域の活性化に寄与するところが大きいと考えられる。

### 4 今後の具体的な展開

唐丹公民館では2018年度から宝くじの助成金で竹炭づくりを行っていた。100kgの竹から15kgの炭を作り、希望者に提供してきた。また2019年度には唐丹地域会議がセブンイレブン記念財団の助成を得て、体験型環境学習活動の一環として、桜並木の整備事業に取り組んだ。このように外部資金を得て事業を展開してきた経験が今回の事例にも役立っている。

今後は学生や外部人材のイベント参加を継続的に進めていき、幅広く参加者を募ることと、収穫物を地元で販売して地域循環を促進するとともに、経済的にもイベントに必要な経費を確保するなど、継続的に事業がすすめられるような仕組みづくりが一層必要になる。公民館にそのような企画実施を担当する職員が継続的に常駐できるようにして、地域活動の拠点として公民館の役割をさらに検証し、評価する枠組みづくりも必要である。

### 5 その他（参考文献・謝辞等）

現地での活動にご協力いただいた自治体や関係者の皆様、そして唐丹町の住民の方々および唐丹公民館の職員の方々に改めて感謝申し上げます。また、複数回のイベントに参加した岩手県立大学の学生にも感謝します。